

夏季福音特別集会 第2回

キリストの賜う「望」と「祈り」

2019年8月24日（京都KKRくに荘）

奥田昌道

3年経ったら退位 主の祈り しつこく祈れ パリサイ人と取税人の祈り 神の国は幼児のごとき者の国 常に祈りつつ目を覚ましおれパウロの自己紹介の仕方 我らを見よ 百卒長の信 われは生命のパンなり 活かすものは霊なり わが神、なんぞ我を棄てたまひし 信・愛・望 すべてを現在化 神の栄光を望みて喜ぶ キリストのご本願が祈らしめる 地震でなく霊震 一人ひとりがずぶの素人 祈り

●3年経ったら退位

お早うございます。これまでの夏の特別集会の中でいちばん充実した集会になりつつあるという印象を持っております。

引き合いに出すのは失礼なんですけれども、上皇様という方が退位なさいましたので――あの方は私より1年下なんです、一つ歳下の弟のようなお方が退位なさったから――やはり私も退位するときに近いのではないか。自分ではだいたい90歳とはじめから思っていましたので、あと3年です。3年経ったら退位しますので、そのあとどうなるかなと、若干気にはしてたんですけれども、初日の晩から司会者の証言を聴いておりますと、もう安心大丈夫、安んじてお眠りくださいというか（笑）、そういう気持ちになって本当に爽やかです。やはり、積み重ねてきたものはそれだけのことがあったのだなと、そういう思いをしておりますので、とても気持ち爽やかであります。

今回、「祈り」を一応、テーマにいたしました。「祈り」に関する箇所をとりあげて、資料として、マタイ伝から祈りの視点からみた「み言葉集」を作りまして、皆さんに差し上げております。これはマタイ伝だけです。あとマタイ伝以外で、マルコ、ルカ、ヨハネと、いう他の福音書でも同じように、祈りのことはどういふふうに取り上げられているだろうか、それがまだいわば宿題として残っているわけです。マルコ伝ではあまり特徴的なものは、祈りに関しては出てこないんです。

ルカ伝をみますと、やはり素晴らしいのがちよこちよこ出てきます。まず、6章12節、

「¹²その頃イエス祈らんとて山にゆき、神に祈りつつ夜を明したもう」（ルカ

6・12）

こういう御言は――「イエスは何より祈りの方だ」と小池先生は言われた――聖書にはあまり出てこないんです、イエスのそういうお姿は。

「イエス祈らんとて山にゆき、神に祈りつつ夜を明かしたもう」



こんな人、我々の中にいますか。こういうふうにして、イエスご自身があとで十二弟子を選んでもおられる。十二弟子を選ぶという非常に大事な時には、ちゃんとその晩、前の日に山へ行つて、夜を徹して祈つておられる。イエスご自身においてすらそうだとしたら、我々凡人がそれ以下であつていいはずがないと、そういう思いがいたします。

私はそんなことを自分でやったことはありません。でも、そういう、

「イエス祈らんとて山にゆき、神に祈りつつ夜を明かしたもう」

と、たった一行のその言葉の中に凄いものが隠されているでしょ。そういうところで、

「はっ、これは凄い。あのイエスさまがこんなふうには夜を徹して祈つておられる。

ところが、お前はなんだ」

という気持ちで背筋が伸びるんですよ。やはり、聖書にとつくむ、御言にとつくむというのはそういうことです。自分の問題に引きつけて、

「イエスさまはこうだった。弟子たちはこうだった。自分はどうなんだ。いやあ、とんでもない。足元にも及びません。主よ、どうぞ、本当にあなたに帰依して、あなたと同じような姿にこの私をつくり変えてください」

と、そこに平伏して、祈りが出てくるでしょ。そんな思いであります。それが今の6章12節です。

次は9章18節、

「18 イエス人々を離れて祈り居給うとき」（ルカ9・18）

弟子たちが、「祈りのことを教えてください」と尋ねてくる場面です。ここでも、「イエス人々を離れて祈り居給うとき」と書いてある。やはり、いちばん深い祈りは人を離れて、イエスの場合だったら、ただ父なる神さまと本当に二人きりで懐ふところの中で祈つていらつしやう。私たちはどうなんだと。マタイ伝では、

「戸を閉じて隠れたるところにいます父なる神に祈れ」

とあります。偽善者たちは街の大路でいかにも祈り深い恰好を示した。それに対して、

「戸を閉じて隠れたることを見ておられる隠れたる父に祈れ」

と、イエスは言われた。そして、「主の祈り」がずっと出てくるわけです。どういうふう祈るか。ああいうところもパツと注目して、

「あ、そうなんだ。あれが本当の祈りの姿なんだ」

と、そういうふうな受けとっていただきたい。

それから今度は9章28節、これは山上で変貌されるところです。

「28 これらの言をいい給いしのうち八日ばかり過ぎて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを牽ひきつれ、祈らんとて山に登り給う。29 かくて祈り給うほどに、御顔さまの状さまかわり、其の衣白くなりて輝けり。」（ルカ9・28～29）

こういう場面にでつくわしたら、本当にもうゾクゾクとするような感じのところですね。



●主の祈り

それから、11章1節から、

「イエス或処にて祈り居給いしが、その終りしとき、

この後で、弟子たちが祈りのことを、

「ヨハネは弟子たちに祈りのことを教えました。イエスさま、あなたもどうぞ、私たちに祈りのことを教えてください」

とお願ひした場面です。そこで主の祈りに繋がっていく。

「イエス或処にて祈り居給いしが、その終りしとき、弟子の一人いう『主よ、ヨハネの其の弟子に教えし如く、祈ることを我らに教え給え』²イエス言ひ給う『なんじら祈るときに斯く言え』父よ、願わくは御名の崇められん事を。御国の来らん事を。³我らの日用の糧を日毎に与え給え。⁴我らに負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免し給え。我らを嘗試にあわせ給うな』」

（ルカ11：1〜4）

マタイ伝のあの「主の祈り」は非常に厳かに整っています。それに対してここは半分しかない。短いです。おそらくこれが本当のところだと思います。マタイ伝はきちんと整理してまとめあげてありますけれども、ここで、

「父よ、願わくは御名の崇められん事を」

と。まず「御名」です。自分のことではない。神さま、あなたご自身、「御名が崇められますように」と。そつちへ目を向ける。それから、

「御国の来らん事を」

と。御国を来らせてくださいと。マタイ伝では、

「御意の天に成る如く地にも成らせ給え」

と続きますけれども、ここでは、

「御国の来らん事を」

これだけです。その次には、

「³我らの日用の糧を日毎に与え給え」

天に関わることは二つですね。もう二つ目からは、

「今日のご飯をちようだい」

と、そういうふうに、自分たちのことを祈ることをゆるしていただいています。デイリーブレッドですね、日常の糧を、しかも日毎に一日一日。これも深いです。貯えは要らんというわけです。その日その日、必要なものがちゃんと添えて与えられる。

「貯えは要らんよ」

ということがここに込められていると思う。次は、

「⁴我らに負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免し給え。」



これは隣人関係、人間関係でいろいろ自分に対して道徳的な——あるいは場合によっては法律的なこともあるかもしれないかもしれません——そういったことでもいろいろ自分を苦しめたり、負債をかかえている、そういったご連中に対して、

「もう全部免除します。そんなことを根にもちません。だから、我らの罪をもゆるしてください」

ということ。「我らの罪をゆるしてください。そうすれば、他のやついろいろなことも全部ゆるします」ではなくて、

「こつちが先にゆるします。だから、私の方もどうぞ、神さま、あなたに対して申し訳ないことがいっぱいありますけれども、それもゆるしてください」

というふうな、

「先に人間関係をきちんとやりなさい」

と。これ厳きびしいですよね。そうでしょ。順序からいいますと。でも、これがキリストの御思いなんです。

まず、キリストは、神さまは、あなたに何を願っておられるか。神さまの方から、キリストの方から、あなたに何をしてくださったか。そのことを本当に深く思えば、人間関係でいろんなことがあるでしょうけれども、それをゆるすことができるはずだよ。マタイ伝ではこの赦しのところはもつと深く整って書かれていますけれども、ここは簡単に、

「われらに負い目あるすべての者を私たちはもうゆるしましたから、だから、どうぞ、私たちの罪をもおゆるしてください」

と。それから、

「我らを嘗試しこらみにあわせ給うな」

と。これも我々の世の中、人間関係その他自然災害も含めて、いろんな試練が訪れます。

「それをどうぞ防いでくださいますようお願いいたします」

という、本当に必要な最小限度の祈りのことがここに書かれています。ありがたいことだと思います。

●しつこく祈れ

それから次に、祈りの質といえますかね、

「一回祈って終わりというようなものではないよ、しつこく祈れ」

ということが言われます。マタイ伝では、

「くどくど祈るな。異邦人はくどくど祈って、言葉数が多ければ聴かれるように思っているけど、そうじゃない。簡単に祈れ」

といって、あの主の祈りを教えられたというのがマタイ伝です。ところが、ここでは、「しつこく祈れ。簡単に引き下がるな」



という、そういう譬話^{たとえはなし}として、友だちが遠方からやって来た。自分のところには何の蓄え^{たくわ}もない。だから、また別の友だちのところへ行って、

「おい、助けてよな。わしの古くからの友人がやって来て、おなかがペコペコなんや。でも、そいつに差し上げるものが何もないので、頼むから、あんたのパンをちようだいよ」

と言ったら、

「もう寝ているんや。もううるさい、めんどくさい」

と応える。ところが、友だちからといって聞いてくれない友人も、そこまでしつこく言われたら、これは聞かざるを得ないなど。昔から、

「泣く子と地頭には勝てぬ」

という諺^{ことわざ}がありますが。それはそうですよ、赤ちゃんが地べたにひっくり返って「ワーン」と泣いていたら、それはもう駆け寄って何とかしないと恰好悪くて、世間体がたちませんよね。そういう場面を思いだすんですけども。

「執拗^{しつよう}にねばつこくやれよ」

ということがここで言われています。だから、キリストが言われたのは、

「簡単に祈れ。ゴチャゴチャ祈らんでいい」

ということをおられるかとおもうと、ここでは、

「根負けするぐらいに祈れ」

という。どうも、「根負けするぐらいに祈れ」という方が本当のようなんです。あの不義なる裁判官の話もあるでしょ。寡婦^{やもめ}が「助けてくれ」と言っても、全然聞く耳をもたなかつたやつが、

「ちよつと待てよ、あいつの言い分を聞いてやったら、これ以上煩わされないですむんだ。そうだ、俺は神を神とも思わないそういうけしからん裁判官だけれども、あのしつこい寡婦だけはかなわん。だから、あいつの言う通り聞いてやろうと。ましてや、夜昼呼ばわる選民のために神は審きをなさらないことがあるえようか。すぐにでもなさってください」(ルカ18・1〜8)

と。あれはルカ伝18章です。ああいうものも出てきます。ここでは、友だちですね。

「⁵また言い給う『なんじらの中^{うち}たれか友あらんに、夜半にその許に往きて「友よ、我に三つのパンを貸せ。⁶わが友、旅より来りしに、之に供うべき物なし」と言う時、⁷かれ内より答えて「われを煩わすな、戸ははや閉じ、子らは我と共に臥所^{ふしど}にあり、⁸起ちて与え難し」という事ありとも、⁸われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて与えねど、⁹求^{もとめ}の切なるにより、起きて其の要する程のものを与えん。」(ルカ11・5〜8)

「もうええよ。もう戸は閉じて、子どもたちと一緒に温かいベッドの中で寝ている



んや。そんな、友だちだからといっても、勘弁してよね」と。
ところが、

「友だからといっては聞いてくれない。しかし、求めの切なるにより、必要なものを与えてくれるだろう」

と。この「求めの切なるにより」ということ。キリストは片一方では、

「簡単に祈れ。ゴタゴタ祈るな」

と、一方では仰っているかと思うと、ここでは、

「求めの切なるにより」

という。本気度を測っておられる。そういうことも出てきます。そして、

「⁹われ汝らに告ぐ、求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。¹⁰すべて求むる者は得、尋ぬる者は見出し、門を叩く者は開かるるなり。¹¹汝等のうち父たる者、たれか其の子、魚を求めんに、魚の代りに蛇を与え、¹²卵を求めんに蠍さそりを与えんや。¹³さらば汝ら悪しき者ながら、

これはちよつとグサツと来ますよね。たとえば、お前たちは神さまの目から見たらとんでもないけれども人間であつても、子どもにだけはいいことをしてやるではないか。まして、天の父は、計りしれないほど素晴らしいお方なんだ。あなたのことを本当に心にかけてくださるんだと。

「求める者に善きものを賜わざらんや」

と、マタイ伝では書いてある。マタイ伝で「善きものを」と書いてあるのが、ルカ伝では「聖霊」と書いてある。

善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天の父は、求むる者に聖霊を賜

わざらんや』（ルカ11・9～13）

これが今のルカ伝11章のところですよ。それから、18章1節が、さきほど申しました、「気落ちせずして執拗に祈れよ」

ということを言われているところですよ。

「¹また彼らに、落胆さおちせずして常に祈るべきことを、譬たとえにて語り言い給う、

²『²或町あるに、神を畏れず人を顧みぬ裁判人あり。³その町に寡婦やもめありて、屢次しばしば

その許もとにゆき「我がために仇あだを審さばきたまえ」と言う。⁴かれ久しく聴き入れ

ざりしが、其ののち心の中に言う「われ神を畏れず、人を顧みねど、

「神さまなんて恐くない。人間どもは何とも思わん。そういう人間だけど、この寡

婦にはかなわんわ。もう、うるさくしてうるさくしてしょうがない」

と、こう言っている。

⁵此の寡婦われを煩わづらわせば、我かれが為に審かん、然らずば絶えず来りて我



を悩まさん」と』

「今、言い分を聞いてやったら、もう今後煩わされなすむんだ。そうだ、その方が楽になるわ」

というけしからん動機から、言うことを聞いてやった。それを引かれて、

6 主いい給う『不義なる裁判人の言うことを聞け、⁷まして神は夜昼よばわる選民のために、たとひ遅くとも遂に審き給わざらんや。⁸我なんじらに告ぐ、速^{すみや}かに審き給わん。されど人の子の来るとき地上に信仰を見んや』
ところが、

「終わりの日に私がやって来る。そのときに果たして本当に地上に信仰があるだろうか。私を本当に受け容れてくれるだろうか」

ということをここで突如として言っておられる。

●パリサイ人と取税人の祈り

この18章は、祈りのところとして非常に大事なことがありますので触れますと、9節からは二人の祈り人のことを取り上げておられます。一人は非常に立派な祈りをするパリサイ人の祈りです。もう一人は取税人である。

9 また己を義と信じ、他人を軽^{かろ}しむる者どもに、此の譬^{たとえ}を言いたもう、¹⁰『一人のものは祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、一人は取税人なり。

パリサイ人の祈りを見てください。

¹¹パリサイ人たちて心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。¹²我は一週のうち二度断食し、凡て得るものの十分の一を献ぐ」

「神さま、私はそこらにいるご連中とはちがうんです。ありがたいですわ。神さまのお蔭です。他の連中は強奪をしたり、不義をやったり、姦淫をしたりとか、けしからん輩^{やから}ですわ。またあの取税人、門の外に居って鳥居の外で祈っている取税人、あんなやつとまた人種がちがう。ありがたいことですわ。だいたい、私は一週間に二度断食してまっせ。十分の一献金をしっかりやっております」

と、もう胸を張つてどうどうと祈っている。ところが、

¹³然るに取税人は遙^{はるか}に立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言う「神よ、罪人なる我を憫^{あわれ}みたまえ」

もう一人は、鳥居の外で目を天にあげることだにせず、胸を打ちて、

「神さま、この罪びとである私をあわれんでください」

と、それ以上の言葉が出てこなかった。ところが、キリストは、

¹⁴われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往



けり。おおよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』」（ルカ18・14）

「この立派なパリサイ人ではないんだよ、あの胸を打って頭を垂れていたこの取税人。神さまはこちらを受けいれなかつた。あの立派なパリサイ人は、見向きもなさらないんだよ」

と。これは宗教家に対する教訓ですよ。だいたい、宗教家というのはやはり、自分がかに熱心であつて、いかに自分が立派なことをやってきたか、ということ誇らしげに言うわけです。そういうご連中に対してキリストは全然、見向きもなさらない。見捨てられる者、うなだれている者は、

「しかし、神さま、私は死ぬわけにいかんのですわ。家族もおります。いろいろおられます。だから、何とかしてください」

と言つて、もう神さましか依りすがるものがない。しかも、依りすがる根拠もない。

「私の側に義も何もないです。あなたにお願いする義理も資格もない人間です。でも、お願いします」

という、そういう砕けた魂に対して無条件に、

「大丈夫だ、私が引き受けた」

と。これがキリストの心なんです。

「義人なし、一人だになし」

と言いますけれども、本当にそうなんです。けれども、キリストは、そういう打ちひしがれた者、目を天にあげることもできないような、そういうご連中に対して、いと近いいます。イザヤ書57章15節にも、

「いと高く聖なるお方が、いと低くおりて、心の砕けたる者のところに宿り給うと出てくる。」

「15 至高く至上なる永遠にすめるもの聖者となづくるもの如此にい給う、我はたかき所きよき所にすみ、亦こころ砕けてへりくだる者とともにすみ、謙だるものの霊をいかし、砕けたるものの心をいかす。」（イザヤ57・15）

そして18節に、その背いたイスラエルに対して、

「18 されど我その途をみたり。我かれを癒すべし、又かれを導きてふたたび安慰をかれとその中のかなしめる者にかえすべし。19 我くちびるの果をみくれり。」

「くちびるの果」というのは、神を讚美するための唇ですから、その果をつくれりと。遠きものにも近きものにも平安あれ平安あれ。我かれをいやさん。此はエホバのみことばなり。」（イザヤ57・18、19）



と、非常に慰め深い御言が出てきております。イエスさまは非常にイザヤ書を愛読しておられたという事です。

だから、ちょうどこれなんかは、さっきの取税人が、はるかに鳥居の外に立って目を天に向けてくともしないで胸を打ちながら、

「神さま、この罪びとである私をあわれんでください」

と、そうやってお祈りしていたという、この姿を神さまの側は喜ばれた。

「おおよそ」を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり」と。こういう言葉が続いています。

●神の国は幼児のごとき者の国

そして、次に幼児のことが出てきてきますので、それも見ておきます。弟子たちは、「邪魔になるから、退け、のけ」と言つて、幼児を追い払おうとした。

「15 イエスの触り給わんことを望みて、人々嬰兒らを連れ来りしに、弟子たち之を見て禁めたれば、

「禁めた」と書いてある。「そんなことをしてはいかん」と。それに対して、

16 イエス幼児ら呼びよせて言いたもう「幼児らの我に来るを許して止むな、

神の国はかくのごとき者の国なり。17 われ誠に汝らに告ぐ、おおよそ幼児のごとくに神の国をうくる者ならずば、之に入るに能はず」(ルカ18・15〜17)

私はあの衡平君の姿を見ますとね、年齢はもう26歳までできてますので大人です、立派なけれども、心はイエスの喜ばれるこの姿なんですよ。本当に私はいつも教えられます。だいいち自分の運命とか、そういうものを咄く言葉を聞いたことがない。それから、人を羨む言葉、あるいは、人を批判する言葉、これも聞いたことがない。本当に私は世の尊敬する人物の中に入りたいくらいに思っている。あの不自由な体で、わずか指先でパソコンのマウスを触つて、それで楽しんだり、いろんな情報を得たりしていますけれども、それ以外には何もできない。それでいながら、全然自分の身の不幸を嘆くことも、人を羨むことも、文句を言うことも何もない。そういう姿に私はいつも心を打たれております。

「どうぞ、この子が私より先に召されることがないようにお願いいたします。また私が去つたあと長く彼がいることも私は望みません。ほぼ同じぐらいの時に向こうへ連れて行ってください」

と、そういう祈り心です。そんな気持ちでいつも訪ねて、帰りぎわにそういう思いをこめて帰ってくるんですけれども。ちょっと、ルカ伝のところ脱線してしまいました。

●常に祈りつつ目を覚ましおれ

次は21章32節から。これはもう十字架が近いところですね。いろいろ世の終わりのこと



も預言されたりしています。エルサレムの滅亡のことも預言なさる。その中で、「いろんなことが起こってくる。そしたら、神の国は近いと心得なさい」と言われる。

「³²われ誠に汝らに告ぐ、これらの事ごとく成るまで、今の代は過ぎゆくことなし。」

「今の代」、この時代というものは去らない。新しき代、これは「代変わり」という意味ではなくて、質的に別の次元の世がやってくるということだと思えます。

³³天地は過ぎゆかん、されど我が言は過ぎゆくことなし。³⁴汝等みずから心せよ、恐らくは飲食にふけり、世の煩勞にまとわれて心鈍り、思いがけぬ時、かの日羅のごとく来らん。³⁵これは徧く地の面に住める凡ての人に臨むべきなり。³⁶この起こるべき凡ての事をのがれ、人の子のまえに立ち得るよう、常に祈りつつ目を覚ましおれ』（ルカ21・32〜36）

これがキリストの弟子たちに与えられた言葉です。もう除酵祭があつて、そして十字架という場面ですから、そこで語っておられるこういう言葉にも非常に注意してもらいたい。その前に、偽キリストがやってくる。戦争のうわさがある。そういうことが絶対避けることができないという。10節をごらんください。

「¹⁰また言いたもう『民は民に、国は国に逆いて起たん』¹¹かつ大なる地震あり、処々に疫病・飢饉あらん。」

人類の歴史はこれの繰り返しのような感じがしませんか。現代だつてそうでしょ。およそ地球上で戦争がなかった、争いがなかった時代はないんじゃないでしょうか。どこかで民族的な紛争、殺し合い、虐殺、そんなことが起こってますね。だから、こういうキリストの言葉は決しておろそかにできない。

「¹²すべて此等のことに先だちて、人々なんじらに手をくだし、汝らを責めん、」

迫害です。

「¹³即ち汝らを会堂および獄に付し、わが名のために王たち司たちの前に、権力者の前に、」

「¹⁴曳きゆかん。これは汝らに証の機とならん。されば汝ら如何に答えんと預じめ思慮るまじき事を心に定めよ。」

「¹⁵あらかじめその時にどう弁明するか、そんなことは心配しなくてもいい。語るべき時は、その時ちゃんと聖霊が与えてくださるから」

ということが別な福音書では出てきてます。

「¹⁵われ汝らに、凡て逆う者の言い逆い言い消すことをなし得ざる、口と智慧とを与うべければなり。」



「迫害を受けた時にどう弁明するか、そんなことをあらかじめ心配しなくても、その時にちゃんと必要な言葉、知恵を与えるから」

と、約束しておられる。しかも、

16 汝らは両親・兄弟・親族・朋友にさえ付されん。

相手に引き渡される、裏切られる。

又かれらは汝らの中の或者を殺さん。17 汝等わが名の故に凡ての人に憎まる

べし。

これほどまでのことを言われているんですからね。私たちが日本においては異邦人です。キリスト教会の中でもまた、「おかしなやつらだ」と思われているかもしれない。つまり、少数者です。しかしながら、

「小さき者よ、おそろな。御国を賜うことは父の御意なり」

とキリストは、いと小さき者を顧みて仰ってくださいている。ここでも、

18 然れど汝らの頭の髪一すじだに失せじ。19 汝らは忍耐によりて其の靈魂を得べし。」（ルカ21・8〜19）

と。キリストはルカ伝の別なところで、

「肉体を滅ぼしても、それ以上できないものどもを恐がることはない」

ということを仰っています。

「恐ろしい方は、肉体を滅ぼしたのち、地獄に投げ込む権威ある方、そういう方をおそれよ」

ということも言っておられます。ルカ伝12章4節、

「4 我が友たる汝らに告ぐ。身を殺して後に何をも為し得ぬ者どもを懼るな。5 懼るべきものを汝らに示さん。殺したる後ゲヘナに投げ入るる権威ある者を懼れよ。われ汝らに告ぐ、げに之を懼れよ。6 五羽の雀は二銭にて売るにあらずや、然るに其の一羽だに神の前に忘れらるる事なし。7 汝らの頭の髪までもみな数えらる。懼るな、汝らは多くの雀よりも優るるなり。8 われ汝らに告ぐ、凡そ人の前に我を言いあらわす者を、人の子もまた神の使たちの前にて言いあらわさん。9 されど人の前にて我を否む者は、神の使たちの前にて否まれん。」（ルカ12・4〜6）

これは大事なことですよ。我々は、キリストを告白するということを決して恐れてはならない。自己紹介の時にまずキリストを告白する。

「私はキリストの弟子です。世的にはこれこれに属し、どういうクラブに属し、こんなことをやっています。でも、魂の世界では私はキリストの弟子です」

と、そういうことを自己紹介の時に先に言っておくと、あとが楽ですよ。それを言っておかなかつたら、いつ次に言ったらいいんだろうと、本当に思い悩んでしまいます。だから、



まずは自己紹介の時に、自分がキリスト者であることを告白することです。

●パウロの自己紹介の仕方

告白の仕方では、パウロの手紙なんかはお手本ですね。たとえば、ローマ書なんかみますと、もうこの自己紹介が長々とあつて、注釈付きで大変なんですね。他のコリント書とかそんなのは、信者に対して言っているときは、

「私はキリストによって召されて信者になった」

とか、その程度の簡単なんですが。ローマ書は、

「キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり、神の福音のために選別れたるパウロ――

と言つて、その次にすぐ、

7 われ書をロマに在りて……

と、続いたらいいのに、その間に、「選別れたるパウロ」の次に「――（ダッシュ）」があつて、ダッシュから数行続いてまたダッシュで終わっている。

―― 2 この福音は神その預言者たちにより、聖書の中に預め御子に就きて約し給いしものなり。3 御子は肉によれば、ダビデの裔より生れ、4 潔き靈によれば、死人の復活により大能をもて神の子と定められ給えり、即ち我らの主イエス・キリストなり。5 我等その御名の為にもろもろの国人を信仰に従順ならしめんとて、彼より恩恵と使徒の職とを受けたり。6 汝等もその中にありてイエス・キリストの有とならん為に召されたるなり―― 7 われ書をロマに在りて神に愛せられ、召されて聖徒となりたる凡ての者に贈る。」（ロマ 1:1-7）

と、そういうふうにつながつている。それはそうでしょ、ローマの人たちはキリストのことを知らない。そうすると、

「キリスト・イエスの僕……神の福音のために」

とあると、

「キリスト・イエスとは何だ、福音とは何なんだ」

と聞きますよね。だから、やはりその注釈を付けなければいかん。だから、まず

「神の福音のために」

と言つたものだから、

「この福音は神その預言者たちにより、聖書の中に預め御子に就きて約し給いしものなり」

あつ、「御子」のことが出てきた、やはり「御子」のこともまた説明しないといかん。それで、「御子は」と、(うらやまひ、)



「肉によればダビデの子孫、神の霊によれば、あのご復活によって神の子と神さまご自身がお定めくださった、即ち我らの主イエス・キリストなり。私たちはその御名の為に世界中の人々を信仰に従わせるように、神さまから恩恵と使徒の職とを受けた。あなた方もその中にありてキリスト属とならん為に召されたんですよ」

と、こういう注釈を付けている。ところが、たとえば次のコリント前書をみますと、

「¹神の御意により召されてイエス・キリストの使徒となれるパウロ及び兄弟ソステネ、²書をコリントに在る神の教会、即ち

「神の教会」のことに注釈を付けている。

いずれの処にありても、我らの主、ただに我等のみならず彼らの主なるイエス・キリストの名を呼び求むる者とともに、聖徒となるべき召を蒙り、キリスト・イエスに在りて潔められたる汝らに贈る。

むしろ、相手方のことをこんなにくどくど言って、自分のことはもう、

「神の御意により召されてイエス・キリストの使徒となれるパウロ」

これで終わりです。相手のことに注釈をつけて、

³願わくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と

汝らに在らんことを。」（コリント前1：1〜3）

と続いている。こうやって自己紹介だって、その手紙、手紙によって違ってますから。そういうところにもちよつと注目してください。

さあそうなる——これも脱線で申し訳ない——ガラテヤ書はどうやっているだろうか。ガラテヤ書での自己紹介。こういう見方もおもしろいですよ。聖書を読んでいくときに、どうやって自己紹介をしているか。それが自分たちの社会で自己紹介する時に役に立つかどうかとか、そういうふうに見ていけば。

「人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中よ

り甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ」（ガラテヤ1：1）

と。かつこいいいではないですか。この

「人よりに非ず、人に由るにも非ず」

というのは、パウロのガラテヤ書の専売特許みたいな文句です。それはたとえば次の11節もそうですよ。

「私の福音は人からきたものではない。自分から編み出したものでもない。じぎじ

きにキリストさまから来た」

ということを言っている。

「11兄弟よ、われ汝らに示す、わが伝えたる福音は人に由れるものにあらず。12我は人より之を受けず、また教えられず、唯イエス・キリストの黙示

に由れるなり」（ガラテヤ1・11）

こういう形で福音の質を説明している。結局、我々は人々に福音を証しするときに、「自分は何者か」ということ。キリストとの関係で、

「自分はなぜあなた方に対して語る立場にあるのか、どうやって救われたのか」
これをやはり言わないといかん。それから、

「私が伝えようとする福音、これはキリストに関わるものです。キリストとはどんなお方か」

と、これも言わなければならない。その自己紹介の分と、伝える福音の内容をズバツと簡潔に言う。これが大事なんですね。それをパウロはいろんな手紙の中でやっているわけです。だから、コリントの人たちにどうやって自己紹介しているのか。ガラテヤの人たちにはどうだ、ローマ書ではどうだと、こういう形で見なければ、これまた大変おもしろいのではないですか。そういうふうには私は思います。これはまた余計なことになってしまったかもしれないませんが。

●我らを見よ

ルカ伝に戻ります。

「誘惑に陥らないように祈りなさい」（ルカ22・46）

と。これは22章、終わりの方ですね。

「44 イエス悲しみ迫り、いよいよ切に祈り給えば、汗は地上に落つる血の雫しずく

如し。」（ルカ22・44）

こういうあのゼツセマネの祈りのことが出てきます。こうやって、イエスご自身が祈っておられる。また、イエスが祈りのことについて語っておられる、そういうものを拾いあげてみたくです。そうしたらこんなものが出てきました。

それからヨハネ伝では、やはり何といっても、イエスの「大祭司の祈り」というヨハネ伝17章、これが素晴らしいですね。我々のために祈ってくださいった。

それから今度は、使徒行伝の方へいきますと、そこで注目したのは使徒行伝1章14節、

「14 この人々はみな女たち及びイエスの母マリヤ、イエスの兄弟たちと共に、

心を一ひたすらつにして只管いのりを務めいたり。」（使徒1・14）

こういうことがあって、そして五旬節の日になって、聖霊のバプテスマのペンテコステです。聖霊が火の如く降ってきた。そこから本当の伝道が始まったというところなんです。その五旬節の前にこうやって、本当に心を一ひたすらつにしてひたすら祈っていたということが出てきます。

「エルサレムを離れないで、ずっと父の約束を待って祈り続けなさい。ヨハネは水のバプテスマを施した。あなた方はやがて聖霊のバプテスマを受ける。聖霊がくだって初めてあなた方は力を受ける。そして、全世界の果てまでキ



リストの証人となる」

と。そういう約束があった。それで彼らはひたすら祈っていた。そして、ペンテコステを迎えたということになっていますから、いかに祈りというものが大事かということがそこでも出てきています。

それから、ついであるが、使徒行伝3章にいきますと、

「一日の三時、いのりの時に

「午後三時」というのは祈りの時というふうな決められていたみたいですね。だから、午後三時にみんなが祈る。その午後三時の祈りの時に、

ペテロとヨハネと宮に上りしが、²ここに生まれながらの跛者かかれて来る。

宮に入る人より施済を乞うために、日々宮の美麗という門に置かるるな

り。³ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、⁴ペテ

ロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。⁵かれ何をか受くるな

らんと、彼らを見つめたるに、⁶ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に

有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』⁷乃ち

右の手を執りて起こししに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、⁸躍

り立ち歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讚美しつつ彼らと共に宮に入れり。

⁹民みな其の歩み、また神を讚美するを見て、¹⁰彼が前に乞食にて宮の美麗門

に坐しいたるを知れば、この起こりし事に就きて驚駭と奇異とに充ちたり。

¹¹かくて彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、民みな甚だしく

驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳せつどう。……

それに対してペテロはここで大演説をしました。

¹⁵生命の君を殺したれど、神はこれを死人の中より甦えらせ給えり、我らは

其の証人なり。¹⁶斯くてその御名を信するに因りてその御名は、汝らの見る

ところ識るところの此の人を健くしたり。

「あなた方が十字架に付けて殺した、その方を神さまは復活させられた。甦らされ

た。我らはその証人である。その御名を信するがゆえに、その御名がこの人を強

めたんだ。」

という。

イエスによる信仰は、汝等もろもろの前にて斯かる全癒を得させたり」（使徒

3・1〜16）

あなた方の目の前でこのような全癒、完全に全身を健やかにされた。そういうことで、

「あなた方は悔い改めなさい」

ということが次から書かれています。聖霊に満たされて、いろんなことがそれから起こっていきことが書かれています。それは省略いたします。



そんなふうには、祈りの箇所を拾いあげていくだけでも、大変な場面がいくつも出てきますので、そういう作業もまた楽しからずやという思いがいたします。

●百卒長の信

それから、昨日の若干、補足をおきたいのですが、昨日は「我らの賜う信と祈り」というタイトルでお話しすべきだったんですけれども。そこで若干、補足だけしておきますが、そういう面から見たときに、その信仰の姿を表してくれるのをマタイ伝から拾っただけでも、次のような箇所がありますので、それを確認しておきたいと思えます。

まずはやはりマタイ伝で素晴らしい姿は百卒長の姿です。8章5節から13節。百卒長は、「私はローマの権威をいただいて、部下に『来い』と言えば来る。『行け』と言えば行く。それは私が何者かではない。ローマ皇帝の権威を私はお預かりしているから、百人隊長の私が言うことはローマ皇帝の命令ということで部下は動く。イエスキヤ、あなたは天の神さま、宇宙の神さまをいただいている方。だから、あなたが一言、『癒えろ！』と仰れば、私の今、中風で苦しんでいる部下は癒えます」と。イエスは、

「出かけて行って、癒してあげよう」

と仰つたんですね。

「部下が苦しんでいるので、イエスキヤ、お願いいたします」

と言つたら、気楽に、

「ああ、行ってあげるよ」

と言って、行くこうとされたら、

「いえ、来ていただくにおよびません。御言を一つくだされば充分です。私が部下に『行け』と言つたら行きます。『来い』と言つたら来ます。あなたが『癒えろ』と一言仰れば、それは宇宙の神さまのご命令だから、絶対にその通りになります」

と、そういうことを言つたというのが、百卒長の信仰のところでしょう。あそここのところを確認しておきたいんです。マタイ伝8章5節から。

「⁵イエスキヤ、カペナウムに入り給いしとき、百卒長きたり、⁶請いていう『主よ、

わが僕、中風を病み、家に臥し祈りて甚く苦しめり』

「部下の苦しみは私の苦しみなんです。なんとか、助けてください」と。「あ、そうか。じゃ、行ってあげよう」と。

⁷イエスキヤ言ひ給う『われ往きて医さん』⁸百卒長こたえて言う『主よ、我は汝をわが屋根の下に入れまつるに足らぬ者なり。』

「主よ、私はあなたを屋根の下にお入れするような、そんな人間ではありません。それは畏れおおいことです。ただ御言をくだされば充分です」



ただ御言のみを賜え、さらば我が僕はいえん。

「私はローマ皇帝の下にある百人隊長です。だから、百人隊長の私の命令は実はローマ皇帝の命令として部下は動きます。あなたは宇宙の神さまの命を預かっているお方です。だから、ひとこと言葉を下されば充分なんです」ということを言った。

9 我みずから権威の下にある者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「ゆけ」と言えば行き、彼に「きたれ」と言えば来り、わが僕に「これを為せ」といえば為すなり」¹⁰ イエス聞きて怪しみ、従える人々に言い給う『まことに汝らに告ぐ、かかる篤き信仰はイスラエルの中の一人にだに見しことなし。

まあイエスという方も素晴らしい方ですね。全然、国籍だとか地位だとか何だとか、そんなものは眼中にない。この百卒長の言葉に感動された。こんな素晴らしい信仰は残念ながら、神の民のイスラエルで見たことがない。こういうふうには、率直に百卒長のことを褒められたんです。やがて、神の国の饗宴にいろんな人が集まってくるだろう。

11 又なんじらに告ぐ、多くの人、東より西より来り、アブラハム、イサク、ヤコブとともに天国の宴につき、¹² 御国の子らは外の暗きに逐い出され、そこにて哀哭・切齒することあらん』

と。こんなふうには、自分たちが本命だと思っているのが全部放り出されて、軽蔑されている無縁な人間と思われている、この百卒長あるいはそういったひたむきな、そういう魂こそは神さまがお喜びになつてお迎えになるんだよと。そういうことを言われた。そして、

13 イエス百卒長に『ゆけ、汝の信ずることく汝になれ』

「汝の信ずることく汝になれ」

と言った。「部下に、なれ」ではなく、「お前が願っている。だから、信ずることくお前になれ」と。

と言い給えば、このとき僕いえたり。」（マタイ8・5〜13）

こういうところに本当に、皆さん、感動して、

「凄い、イエスさま、凄い。これいただきですよ」

と。見えるところがどうであろうと、そんなことはもう乗り越えて、

「宇宙の神さま、あなたの御言は凄い。必ず成ります。どうぞ、御言を下さい」

と。だから、「御言、御言」と言っている人が、本気でその御言をそのように受けとっているか。

●われは生命のパンなり

キリストは言われました、

「われを喰え、われを飲め」



と言われた。

「人が生きるのは、パンだけではない。神の言ことばで生きる」
と言われたけど、「言ことばで生きる」ということは、

「我を喰え、我を飲め。私と本當に一つとなれ。そうでなかつたら、あなたに生命はないよ」

と。それを言っておられるのが、ヨハネ伝6章ですね。始め、パンの奇蹟のことが出てくる。人々はイエスを捕まえようとしてやって来る。それをイエスは逃れて行かれる。そこから始まっています。ヨハネ伝6章をちよつと開いてください。6章15節、

「¹⁵イエス彼らが来りて己きたをとらえ、王となさんとするを知り、復またひとりにて山に遁のがれたもう。」

イエスは山に逃のがれて祈るつもりです。イエスは大きなことをなさる前や、なさった後は、必ず祈っておられますよ、独り人々を離れて。ところが、人々はそれを追いかけて来た。そこで山に逃のがれたと書いてあります。そして今度は、夜明けの四時頃に湖の上を歩いて来られるわけです。弟子たちは先に船に乗って出かけて行ったという場面です。

¹⁶夕ゆふになりて弟子たち海にくだり、¹⁷船ふねにのり海を渡りて、カペナウムに往かんとす。既に暗くなりたるに、イエス未だ来りたまわず。

イエスは独りまだ山で祈っておられるわけです。

¹⁸大風おおかぜふきて海ややに荒れ出づ。

この「海」というのはガリラヤ湖です。

¹⁹かくて四五丁よちこぎ出でしに、イエスの海の上をあゆみ、船に近づき給うを見て懼おそれたれば、

さあ、イエスが海の上を歩いてこられたら、弟子たちは「恐れ」と書いてある。

「あつ、イエスさまが来てくれた。助かった」

と言っていない。

「こわい、幽霊ではないか」

と。弟子たちも、まさかイエスが湖の上を歩いて来られるなんて思いもよらないことですよ。そんなことはあり得ないことですよ。だから、「これは幽霊ではないか」と恐れたと書いてます。そしたら、イエスは、

²⁰イエス言いたもう『我なり、懼おそるな』

あのクリスマスクリスマスの時の羊飼いたちに、天使たちが、

「おそろな。楽しい、嬉しい音信おとずれをあなた方に伝えるんだ」

と言っています。すべて神さまのみ業わざが現れる時は、みな人々は恐いんですよ。自分が経験したことのないようなことを示される時は、こわい。しかし、「おそろな」と。こころでも、

「我なり、懼おそるな」



と言われた。

21 乃ちイエスを船に歡び迎えしに、船は直ちに往かんとする地に著けり。
人々はイエスを追いかけてやって来た。それに対して、イエスは、

26 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、
徴を見し故ならで、パンを食いて飽きたる故なり。』

「徴」というのは、「御利益」とは全然ちがいます。徴というのは、パンの奇蹟を通して何を示そうとなさっているか。パン自体が目的ではない。そのパン、無限無量のパン。男だけでも五千人に、五つのパンと二匹の魚を分かち与えて、五千人以上の人を養って、

「なお十二の籠に満ち足り」

「七つの籠に満ちたり」

とか、そういうことが書かれています。ああいう出来事を通して、何を神さまは示そうとなさったのか。それをしつかり受けとらなかつたら、パンそのもの、奇蹟そのものに心を奪われていたら、何にもならない。せいぜい、「夢をもう一度。もう一回やってください」と、そんなことで終わる。そうじゃない。

「あの出来事を通して神さまは何をあなた方に語ろうとなさっているか、その中に躍り入れ」

と、それが御意なんです。それが以下に出てきます。そして、本当のパンというのは、

「私自身が生命のパンだ」

と繰り返して言っておられます。

「モーセが与えたパンは、それを食べた人はみな死んだではないか。でも、私は生命のパンだ。私を食べる者は死なない、渴かない」

と。35節、

35 イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでも渴くことなからん。36 されど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。』

次の37節からも注目していただきたい。

37 父の我に賜うものは皆われに来らん、我にきたる者は我これを退けず。

だから、私たちはなにか、

「自分でキリストのところへやって来た、自分がキリストを信じた」

と思っているが、そうじゃないと。

「父が引き寄せて、私のところへあなた方をお連れになったんだ」

と。だから、

「あなた方の信仰とあなたは思っているかしらんけど、その奥に神さまのみわざ、神の御手が働いている。そして、私のところへ来た者は、私は絶対に離さない。



捕まえて離さない」

と、そういう約束をここでなさっている。

38 夫わが天より降りしは、我が意をなさん為にあらず、

自分の勝手な思いを実現するためではない。

我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。39 我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして、終の日に甦えらする是なり。

40 わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』

と書いてある。この6章のところは非常に大事なところですよ。ヨハネ伝の3章とこの6章、この二つをリンクさせて受けとっていただきたいと思えます。

44 我を遣しし父ひき給わずば、誰も我に来ること能わず、我これを終の日に甦えらすべし。

我々は自分でキリストのところへ行つたように思っているけど、実はそうではない。神さまの御手が働いている。イエスさまご自身の、御霊の主キリストさまの霊の働きによって、私たちはイエスさまのところへ引き寄せられてきた、吸い寄せられてきたんだよと。

47 まことに誠になんじらに告ぐ、信ずる者は永遠の生命をもつ。48 我は生命のパンなり。49 汝らの先祖は、荒野にてマナを食いが死にたり。50 天より降りるパンは、食う者をして死ぬる事なからしむるなり。51 我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』（ヨハネ6・15〜51）

と。こういうことを仰っています。

「我をくらしえ、我を飲め。私と一つとなれ。頭で信ずるのではない。私と本当に一つになるんだ」

と。パウロは、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と言った。小池先生はそれを『エン・キリスト』（EN CHRIST）というタイトルにして、ご自分の雑誌の表題にされたでしょ、われ「キリストのうちに」と。それは御霊のキリストです。それも全部、神のみわざです。救いの根拠は自分たちにはない。神の御意なんです。そして、時みちて、それを我々に成就してくださった。神さまが始められた御業は、妨げるものはないはずですよ。我々が逃げて行ったらダメですよ。私たちが、

「主よ、キリスト」

と言つて、すがりついていけば、絶対に捨てたまわらない。そのことを硬く信じてください。人間の側にどんな欠点があろうと、何があろうと、そんなことは問題ではない。キリストはひとこと、一つ条件を付けられた。



「聖霊を瀆すものは赦されない」

と言われた。聖霊という神さまの霊を、どれだけイエスが大切にしておられたか。敵どもは、
「彼はベルゼブルの首で、ベルゼブルを追い出している」

と。つまり、「悪魔の首を利用して悪霊を追い出している」と言ったから、イエスは本当に怒られたわけですよ。

「聖霊をけがす、そんな者は絶対にゆるされない」
と、ルカ伝の中に出てきます。

●活かすものは霊なり

さっきの6章に戻りますと、

「⁵¹我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。
天から降るパンは、食べる者に生命を与える。永遠に生きるんだと。」

我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん⁵²」

それは十字架がそこにありますから。

⁵³イエス言い給う『まことに誠になんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。⁵⁴わが肉をくらい、我が血をのむ者は、永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦えらすべし。⁵⁵夫わが肉は真の食物、わが血は真の飲物なり。⁵⁶わが肉をくらい我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。⁵⁷活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。』

イエスさまが父なる神さまの生命をいただいて生きておられる。これはもう当然我々は、「その通りです」と言います。けれども、

「そのように私を食べる者、私と一つになる者、そういう者を私は生かす。永遠に生かす。そして使命を与える。証人にする^{あかしびと}」

と、そういうことを約束してくださっているんです。ところが、そういう言葉を聞いた弟子たちはたくさん離れて行ったと書いてある。

⁶⁰弟子たちの中おおくの者これを聞きて言う『こは甚だしき言なるかな、誰

か能く聴き得べき^よ』

「わが肉を食い、わが血を飲め」だとか、人食い人種みたいなことを仰るものだから、

「こんなものは聞いてられんわ」
といて咬いた。それを聞かれたイエスは、

⁶¹イエス弟子たちの之に就きて咬くを自ら知りて言い給う『このことは汝ら^{つまず}を躓かするか。⁶²さらば人の子のもと居りし処に昇るを見れば如何に。』

と。次の63節は非常に大事な言葉です。



63 活かすものは霊なり、肉は益する所なし、」（ヨハネ6・51〜63）

「肉」というのは、生まれながらの人間性、ヒューマンネイチャーと思っていた方がいい。我々、生まれてきた、生まれながらの人間が持っているすべてを「肉」と呼んでいます。肉欲とかそういう意味ではない。朽ちるものです。それに対して、

「活かすものは霊なり」

というのは、これは神の次元のものでしょ。キリストは神さまの次元、霊の次元から、この肉の次元へ降りてくださった。だから、肉というのは現象界ですね、我々の肉体をも含むこの地上の現象世界。これが肉ということ。それに対して、神さまの次元、

「初めに言あり。言は神なりき」

とヨハネ伝の初めにあります、ああいうレベルのもの。これが霊です。キリストさまはそこに居られたのに、そこからその御座を捨てて、地に、肉の世界に降ってきて、人の姿をとって、人の悩みを悩みとして歩んでいく。苦しんでいる者を助けていかれた。助けていかれたのは、天の次元から力が来る。神の霊の働きによってそれをなさった。聖霊によって身ごもったマリアから生まれた方だから、それができたわけですね。人の苦しみがかかるというのは、マリアさんからきてますから。純情なマリアさんのあの偽りなき心、それがイエスをつかまえて、人々の苦しみを苦しみとして味わってくださいているということだと思う。

そして、本当に人を生かすものは、見えている現象界、肉の世界ではないと。これは一時的なものだ。本当の神の次元、霊の次元に飛躍して、そこに生まれ変わって、そういう次元をいただいたら、これは我々の肉なるものが滅びても、決して滅びない。

「人新たに生まれずば、神の国に入ることあたわず。神の国を見ることもあた

わず」

と、あのヨハネ伝3章のニコデモとの対話の中で出てきますね、あれですよ。

「母の胎から生まれた者、肉から生まれた者は肉だ。霊から生まれる者は霊だ。

上から、神さまに産んでいただかないといけない」

と。

● わが神、なんぞ我を棄てたまひし

では、どうしたらいいんですか。その答えが、ヨハネ伝では3章16節に、

「それ神はその独子ひとりごを賜うたほどに世を愛し給えり。信する者の滅びずして永

遠の生命を得んためなり」（ヨハネ3・16）

と。ちゃんと十字架が隠されているんです、あそこには。ですから、ここで、

「生かすものは霊である。肉、我々の自然的な生物体としての肉、地上のもの、これは永遠のものではない。土にかえっていく。しかし、この霊を受けとっていたら、



その人はもう死なない。肉体が土に還った時に、その人は霊体を賜^{たまわ}って、天の境界へと羽ばたいていく。そういう世界を私は与える」

と。キリスト以外に誰もできなかった。しかも、キリストはご自分が、我々の死を引き受けて、自分が地獄に落ちる。それを味わって、そして、私たちに天国をくださったという、この捨て身の愛。これは単に肉体を犠牲にしたというレベルではないんです。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」というのは、

「私はあなたと本当に今まで一つに生きてきた。分離不可能なくらいにあなたと私は一つでした。それが、今、引き裂かれて、あなたのいない真つ暗闇の味わったことのない世界に突き落とされようとしている。そんなことがあつていいんですか。私はあなただけを頼りにして、あなたの御意だけが私を動かしてきた。そういう私を、あなたは自ら引き裂いて、真つ暗闇に突き落とそうとなさっている」

と。それが、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

という言葉のお気持ちだというふうに私は推測している。本当のところは、キリストご自身に聞いてみないと誰にもわかりません。人間は推測できないけれども、私はそう思う。

「あんなに一つであつた私が引き裂かれて、望んでもいない、神なき世界、暗黒に突き落とされる。それでいいんですか。あなたに背いたから罰としてそれを受けらるなら、それはいいですけども。でも、私はなにひとつ御意に背いたことはありません。私は今まで自分はなかつた。あなたがすべてであつたあなたに従いきつた私、それがなぜ、あなたのない暗黒の地獄に突き落とされなければならぬんですか。それであなたの義が成り立つんですか」

と。義人は生きるんですよ。イエスほどの義人はないですよ。それがどうして、地獄のどん底まで突き落とされなければならぬんですかと。

「それであなたの義は立つんですかというプロテストをやっている」

というふうに、小池辰雄は言いました。

「あの言葉があるから、我々は救われるんだ」

と、そこまで小池辰雄は言いました。私は始めはわからなかつたんです、その言葉が。でも、何となくわかるような気がします。

それとこの6章63節がつながっているように思う。

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし」

と。ヒューマンネイチャー、生まれながらの人間性、神からのいただきもの。でも、それが最後のものではない。

「最後のものは、そういうものを突き抜けた、天の次元のもの。それが究極のもの



なんだ。それをあなた方に上げるんだよ」
 と。なにかそういう御思いがこもっているように思う。

「肉は益する所なし」

は英文によりますと、

“human nature is of no use at all”

ヒューマンネイチャーは全く役に立たない。神さまの目の前にはと。そういう訳です。

「⁶³活かすものは霊なり、肉は益する所なし。わが汝らに語りし言は、^{ことば}霊なり、

生命なり」（ヨハネ6・63）

この6章63節の言葉はどれだけ深いか。それを、どうぞ、生涯かけてでも味わっていただきたいなど、そういう思いがします。

●信・愛・望

信・愛・望を語っているところは、コリント前書13章です。結婚式でいつもここが引かれます。

「¹たとい我もろもろの^{くにびと}国人の言および御使の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響く^{にようはち}鑢鉞の如し。²仮令われ^{たとい}預言する能力あり、又すべての^{ちから}奥義と凡ての知識とに達し、また山を移すほどの^{おおい}大なる信仰ありとも、愛なくば数うるに足らず。

「たとえ私が御使の言葉を語ろうと、あるいは山を移すほどの強い信仰であろうと、愛がなかったら私は全くむなし、ナンセンスだ」

ということを言います。

³たとい我わが財産をことごとく施し、又わが体を焼かるる為に付すとも、

愛なくば我に益なし。⁴愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、

驕らず、⁵非礼を行わず、己の利を求めず、

これは大事ですね、己の利を求めない。

憤らず、⁶人の悪を念わず、

これも大事です。ついつい人間は人の悪を思ってしまふ。「あいつ、クリスチャンのくせにこんなことをやっている」なんて、いろいろ人の悪を思う。

⁶不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、⁷凡そ事忍び、⁸おおそ事

信じ、⁹おおそ事望み、

ここに「望み」が出てきます。

おおそ事耐うるなり。⁸愛は長久までも絶ゆることなし。然れど⁹預言は^{すた}廃れ、
 異言は止み、知識もまた¹⁰廃らん。

預言は廃れ、知識も滅びていくけれども、しかし、



然れど、かの時には顔を^{あわ}対せて相見ん。今わが知るところ^{まった}全からず、然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。

キリストと相まみえるあの時、終わりの時になりますと、ちょうど神さまの側で私を全く知っておられるように、今度は私の側でも神さまのことを百%、ハッキリと知ることができると。

¹³げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、^{おおい}而して其のうち最も大なるは愛なり。」（コリント前13・1〜13）

●すべてを現在化

ここに信仰、愛、希望と書きました。順序からいうと、信・望・愛なんですけれども、あえて、「信」を右に、「愛」を真ん中に、「望」を左に書きました。これはどういう気持ちなんでしょうか。そして、下に「祈り」を書きました。祈りの下に更に「言」と書きました。この構造を——謎解きのようにすけれども——皆さん、しつかりとつかまえてほしい。

「信」、これはやはり、十字架も過去の出来事ですね。つまり過去、我々にとっては福音書もすべて過去ですね。そういった過去のものなんだけれども、それを現在に引き寄せている。それを現在としてそれを生きる。これが大事なんです。過去でありながら、それを現在のものに引き寄せて、そして、それを成らしめるものは「祈り」であり、祈りを支えているものは「御言」なんです。御言という土台があつて、御言を拠り所にして、そして我々は祈る。そして、過去の恵みを現在に引き寄せる。

そして、「愛」は現在、上から注がれています。

それから、「望」、これは将来のことです。将来のことだけれども、それを現在に引き寄せる。すべてを現在化する。それは祈りがそうしますし、その祈りを支えているのは、神さまの御言、約束なんです。神の約束の御言なんです。それがこのすべてを現在化させてくれます。

こういう角度で、信は過去のもの。望は将来の未来のもの。愛は現在上から注がれている。まさに現在です。しかしながら、過去のものである信も、将来のものである望も、それを現在化して、祈りでそれを現在化して、それを支えてくださっているのが御言の約束、キリストの御言の約束、それがそれを可能にしてくれる。

ですから、この構造ですね。愛は現在、上から無限無量に注がれてくる。信はこれを現在に引き寄せる。望は将来のものだけれども、それを現在化していく。すべてが、

「現在^{ここに}において」

という角度で聖書の言葉をつかまえていくということ。そういうことをぜひ、心がけていただければ、いいんじゃないかなと思います。



● 神の栄光を望みて喜ぶ

その望みのことに關して、御言を引きますと、ローマ書5章の1節、

「1 斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我らの主イエス・キリストに頼り、神に対して平和を得たり。2 また彼により信仰によりて、今立つところの恩恵に入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶなり。」

ここに「望み」が出てきました。

3 然のみならず患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、4 忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。

ここに「希望」が出てきました。「希望を生ず」という約束がされています。

5 希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛われらの心に注げばなり。

ここに「愛」が出てきました。だから、信仰も愛も希望も全部、現在化されている。愛は上から注がれている。こういうことがこの5章だけでもわかりますね。

6 我等のなお弱かりし時、キリスト定まりたる日に及びて、敬虔ならぬ者のために死に給えり。7 それ義人のために死ぬるもの殆どなし、仁者のためには死ぬることを厭わぬ者もやあらん。8 然れど我等がなお罪人たりし時、キリスト我等のために死に給いしに由りて、神は我らに対する愛をあらわし給えり。

キリストは、この不敬虔なる者、不信心者、こういう者のために死んでくださった。義しい人間のために死のうという気はちよつと普通は思わない。私とは縁のない人だと。ところが、情け深い人のためには、私は身代わりになつてもいいと、そのくらいの気持ちにもきつとなるだろう。だけど、そのいづれでもない。義しい者でも、情け深い者でもない。罪びと、どうしようもないやつ、そういう者のためにキリストは十字架で死んでくださった。生命を献げてくださった。そこに神の愛が現れている。十字架における神の愛。これがこの5章で言われているわけです。

9 斯く今その血に頼りて我ら義とせられたらんには、まして彼によりて怒より救われざらんや。10 我等もし敵たりしとき御子の死に頼りて神と和ぐことを得たらんには、まして和ぎて後その生命によりて救われざらんや。11 然のみならず今われらに和睦を得させ給える我らの主イエス・キリストに頼りて神を喜ぶなり。」（ロマ5・1〜11）

「その十字架の血によって、私たちは神さまから受け入れていただいている。もう受け入れていただいた以上、将来の審判、審き、もうこれはない。敵対していたときさえ、御子の十字架をとおして神さまは私たちを受け入れてくださったとしたら、もう今、受け入れられている以上は、更にもつともつと素晴らしい世界



へと導いていかれるはずだ。我らの主イエス・キリストにより神を喜ぶ。神さまは恐い存在だった。裁かれるのではないかと、そういう恐い審判者であった。そういうお方が、私は逆に神さまを喜ぶような人間に変えられてしまった。なんとありがたいことか」

と。そういうことがこの5章に出てきているわけですね。

「²また彼により信仰によりて、今立つところの恩恵^{めぐみ}に入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶなり。³然のみならず患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、⁴忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。⁵希望は恥を来らせず、我らに賜^{たま}いたる聖霊によりて神の愛われらの心に注げばなり。」（ロマ5・2〜5）

と。そういう、信仰、希望、愛がこのローマ書5章に出てきているということなのです。

●キリストのご本願が祈らしめる

それから、ローマ書8章18節から。ローマ書8章にもまた、信・望・愛がちゃんと出てきている。信というのは、十字架を受けとつている世界でしょ。それは8章1節から11節までに出てきます。12節からも、「新しくせられる」という、神の子とされる次元のことが書かれているのがローマ書8章ですけれども、今はこの8章の前半はぬきにして、希望という面からいいますと、18節から25節までです。

「¹⁸われ思うに、今の時の苦難^{くるしみ}は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。¹⁹それ造られたる者は、切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。²⁰造られたるものの虚無^{むなしき}に服せしは、己^{ねが}が願^がによるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。²¹然れどなお造られたる者にも滅亡^{ほろび}の僕^{さか}たる状^{さま}より解かれ、神の子たちの光栄の自由に入る望^{のぞみ}は存れり。

呻^{うな}いているこの自然界にもこの望みが残されている。

²²我らは知る、すべて造られたるもの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。

自然界ばかりではない、人間もそうだと。

²³然^{しか}のみならず、御霊^{はしめ}の初^{はじ}の実^みをもつ我らも自ら心のうちに嘆きて、子とせられんこと、即ちおのが体^{からだ}の贖^{あがな}われんことを待つなり。

御霊をいただいた私たちもやはり、肉体を宿としているかぎりには、まだ神さまとの間に距離がある。体が贖^{あがな}われるという望みをもって我々は生きている。我らはこういう望みにあるからこそ救われてあるんだよと。

²⁴我らは望^{のぞみ}によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争^いでな^いお望ま^んや。



もう実現してしまったものは、なにも望む必要はない。これから実現するということを望む。しかもそれは願望ではない。必ず成就する。そういう約束があると。

25 我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。
そこから当然、呻き、祈りが出てきます。

26 斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き歎（呻き）をもて執成し給う。

「我らはどのように祈っていいかわからないけれども、御霊がみずから言い難い呻きをもつて執り成してくださっている。その御霊の思いを神さまは知っていてくださる。それを必ず成就してくださる」

ということを以下ずっと書いてある。

27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に
適いて聖徒のために執成し給えらばなり。28 神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。「（口マ8・18～28）

「神を愛する者、御旨によりて召されたる者の為には、あらゆることが凡てプラスに変質していく。どんなマイナスと見えることも全部プラスに変化していく。これがキリストの賜う勝利である。目の前に実現していない。だからこそ、いよいよ必ずそれは実現するという、そういう希望をもって我々は進む」

と。そういうことをここで言っている。

信仰と望みのことを言いましたが、それをヘブル書が、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」（ヘブル11・1）

という言葉で表している。しかも、望むところも、勝手な願望ではない。御言に裏付けられて、望むんです。御言の約束がある。それがまだ成就していない。しかし、

「あなたが約束なさったことは必ず実現します」

と。それが信ですね。ことが成っていないのを望む。そして、必ず成るということを信ずる。だから、信も望も同じ根っこから出ているように思う。それを支えているのが神さまの愛ではないでしょうかね。愛の御思いがそれを必ず実現してくださる。

だから、ここに信・望・愛と書きました。望は、未来のものだけでも、それを現在に引き寄せる。信は、過去の十字架をベースにした過去のものだけでも、それを現在に引き寄せる。愛は、上から絶えず無限無量の愛を注がれる。それを引き寄せてくれるのは、引き寄せる我々の側は祈りである。しかし、我々の祈りは、ただむやみに祈るのではない。神さま、キリストが、

「このように祈れ、私が助けるぞ。聖霊、助け主、真理の御霊があなたの祈りを助けるんだから、大丈夫だ」



というお墨付きを私たちはいただいている。だから、大胆に祈れるわけです。そういう、この構造をやはり、しつかり皆さんがつかまえて、私たちが依つて立つところは願望ではない。イエス・キリストの御言の約束、キリストのご本願が、私たちをして祈らしめる。祈らないではいられないようにしてください。そういう確信をもって私たちは祈っていく。そしたら、今は真つ暗でも必ず夜明けがくる。必ず光が射してくる。こういう確信ならざる確信というものが与えられていく。それがクリスチャンの生き方ではないでしょうか。

●地震でなく霊震

それから、祈りのことについてちよつと補足しますと、使徒行伝の中で何か所か祈りのことが出てきます。ちよつと拾いあげていきますと、やはり祈りによつて凄いことが起っているんです。さっきのキリストの名によつて癒された跛者のこともそうですし、ペテロの命が危なかつた時に、信者たちが祈っていたという箇所があります。

4章に、イエスの名によつて跛者を立たしめた。そういうことをやったものだから、大祭司のアンナスだとか、いろんなものが何とか彼らをやっつけようと思つたけれども、どうしようもなかつたということが書いてます。そして、18節にきますと、

「¹⁸乃ち彼らを呼び、一切イエスの名によりて語り、また教えざらんことを命じたり。

それに対して、

¹⁹ペテロとヨハネと答えていう『神に聴くよりも汝らに聴くは、神の御前に正しきか、汝ら之を審け。²⁰我らは見しこと聴きしことを語らざるを得ず』

と。こつちやつて神を崇めた。そこで、どうしようもないということ、彼らを釈放した。そして許された。ペテロ、ヨハネが自分たちの仲間へ帰つていった。そうすると、

²³彼ら積されて、その友の許にゆき、祭司長・長老らの言いし凡ての²⁴ことを告げれば、²⁴之を聞いて皆心を一つにし、神に²⁵対し、声を揚げて言う『主よ、汝は天と地と海と、其の中のあらゆる物とを造り給えり。²⁵曾て²⁶聖霊によりて、汝の僕われらの先祖ダビデの口をもて「何ゆえ異邦人は騒ぎ立ち、民らは空しき事を謀るぞ。²⁶世の王たちは共に立ち、司らは一つにあつまりて、主および其のキリストに²⁷逆う」と²⁷宣給えり。』

そういう預言までされている。ところが、ピラトがゆるそうとしたけれども、彼らはそれをゆるさなくて、十字架につけて殺した。

²⁸御手と御旨²⁸にて、斯く成るべしと²⁹預め定め給いし事をなせり。²⁹主よ、今これらの脅喝³⁰を御覽し、僕らに御言を聊かも臆することなく語らせ、³⁰御手をのべて医を³¹施させ、汝の聖なる僕イエスの名によりて、³¹徴と不思議とを行わせ給え』



そうやって祈って、祈りおえたら、

31 祈り終えしとき、其の集りおる処ふるい動き、みな聖霊にて満たされ、臆
することなく神の御言を語れり。」（使徒4・18〜31）

そういう凄いいことがここに出てきますね。

それから、使徒行伝16章のところ。これはピリピの教会が生まれる発端になった箇所です。祈り場を探していたら、ルデヤという女性に出会って、ルデヤの所でお世話になった。ところが、占いの霊に憑かれた女奴隷のその霊を追い出して、自由の身にしてやった。その占いの女をとおして利益を得ていた主人が怒って、パウロとシラスを牢屋に閉じ込めてまっただという、そういうくだりが使徒行伝16章です。そここのところを読みますと、もう群衆もみな寄ってたかって、パウロとシラスをやっつけるわけです。

「22 群衆も齊しく起こり立ちたれば、上役ら命じて其の衣を褫ぎ、かつ笞にて打たしむ。」

「笞」というのは、先に三角になった金属がくっつけられている。狼をやっつけるための羊飼いの道具なんです。それで叩かれると、肉体が抉られるわけです。そういうひどいことで打たれてしまった。

23 多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。24 獄守この命令を受けて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。25 夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讚美するを囚人ら聞きいたるに、

ところが、このパウロとシラスは夜中に神さまを讚美している。これには参りますよ。「なんだ、神さま、あんなやつらにこんな酷い目に合わせて、あなたは放っておかれるのですか」と、文句のひとつも言いたいところだけれども、パウロとシラスは神を讚美している。囚人たちもそれをじつと聴きいつている。そしたら、

26 俄に大なる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、

小池先生はこの地震を「霊震」と言われた。

その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縲縛とけたり。27 獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思ひ、刀を抜きて自殺せんとし
たるに、

獄守は、囚人は機あらば逃げようとしているから、当然みな逃げ出したと思って、自害しようとした。そしたら、パウロは「待て、誰も逃げはせん」と言った。

28 パウロ大声に呼わりて言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』29 獄守、燈火を求め、駈け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、30 之を連れ出して言う『君たちよ、われ救われん為に何をなすべきか』

驚いたのは、この獄守ですよ。もう常識では考えられない。何たることだということでも、さつそくパウロとシラスを自分の家に招いて、傷の手当をし、そしてその晩で信者になっ



てしまった。「いつたい、どうしたらいいんですか」と。

31二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』³²かくて神の言を獄守とその家に居る凡ての人々に語り。33この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、³⁴かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。」（使徒16・22〜34）

と。こんな凄いことが起こっている。ここからピリピの教会が始まったわけです。このようにパウロとシラスがあのような目にあいながら、なお神を讚美していたという、あの姿が凄い。そしたら、神さまはそれにちゃんと応えておられる。こういう事態ですね。

●一人ひとりはずぶの素人

まあそんなことで、今日は、信・望・愛を、一番それらを支えている祈りのことを少し学んだわけですけれども、私たちが今、生かされている現実、事態うつつというのは現なんですよ。決して過去のものではない。過去のどこか遠い所で起こったものを歴史として学んでいるのではない。常にそれを現在化し、

「現在、今、直ちに、このところで、そこに御業みわざが現れるということ素直に受けとつて、神を讚美し、御名を讃えていく」という、そういう歩みです。

我々は無資格者です。いわゆる神学校で聖書を勉強したわけでもなく、しかるべき組織の中でトレーニングを受けたことのない、ただの素人しらうととして、私は大学での教職のかたわら始めてきた。それが50年たって、今がありますけれども、そういうずぶの素人がひたすら御言、御霊によりすがって、そして歩んできた。それだけのことです。ということは、皆さん一人ひとりはずぶの素人です。キリストだけを頼りにしてやってきた。その祈りにキリストは応えられないはずがない。その確信をもって、皆さん、歩んでいただきたい。

私はここで語れるのはあと3年と想っている。この秋で87歳になりますから、90歳で退位します（笑）。そしたらあとは、皆さんにやっていただきます。私はそこで皆さんのお話を聴こうと思っています。命があればですよ、召されていなければですよ。そして、

「ああ、みんな成長したな。頼もしいなあ」と、そう私を喜ばしてほしいんです。パウロも時々、

「私を喜ばしてほしい」

なんて言っているでしょ。そんなビジョンを私は持っていますのでね。

本当に私たちはずぶの素人が、東洋の一角でこうやって凱歌をあげている。その声を消すものはない。

「いの輩しむがらひ黙せば、石叫ぶべし」



と、キリストは弟子たちをかばって言われた。私たちもそういう心意気で、支えてくださるのは御霊のましまである。

「み霊の我が主は わが身を抱き

十字架に耐え得る 力を賜う」（召団讃歌B2「使徒らの昔を」）

という、あの小池先生の讃美歌がありますように、そのようにして私たちは高らかに凱歌をあげて進んでいく。そんな気持ちでありますので、皆さんも、どうぞ、よろしくお願いいたします。

それでは、これで終わります。

● 祈り

では、また時間もまいりましたので、私が短く祈って終わりますが、次の祈りの時間に皆さんにたっぷり祈っていただこうと思います。

主さま、今朝は皆さんが御所での祈り会をお持ちくださいまして、ありがとうございます。リードしてくださった兄弟に感謝いたします。

主さま、後継者が次々と育ってくださっていることを、僕は心からうれしく感謝いたします。この召団は、この集いは、あなたがお立てくださったものでございます。十字架・聖霊という、この土台の上にあなたはこの群を築きあげてくださいました。

「天地は過ぎゆくかん。されどわが言は過ぎゆくことなし」

と仰ったあなたは、この群をお棄てになるはずがありません。どうぞ、一人ひとりを一騎当千の強者^{つわもの}として、あなたが福音の戦いのために練り鍛え、そして強め、御言・御霊一つとなって全身をもってあなたを証しする、そのような働き人としてお用いくださるようお願いいたします。

讃美と感謝と祈りを主イエス・キリストさまの御名によつて、今、御前にお捧げいたします。アーメン。

